松江市文化財調査報告書 第136集

市道古志大野線道路改良事業に伴う発掘調査報告書

米塚遺跡・西後遺跡

平成23(2011)年1月

松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

松江市文化財調査報告書 第136集

市道古志大野線道路改良事業に伴う発掘調査報告書

米塚遺跡・西後遺跡

平成23(2011)年1月

松江市教育委員会
財団法人 松江市教育文化振興事業団

例　　言

1．本書は平成22年度に財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した市道古志大野線道路改良事業に伴う米塚遺跡・西後遺跡発掘調査報告書である。

2．本書で報告する発掘調査は松江市から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した。

3．本調査の所在地は、以下の通りである。

米塚遺跡　松江市西谷町813-4・5・6

西後遺跡　松江市西谷町780-3・7・9、781-1・4、782-2・4、783-1、784-1

4．現地調査期間

米塚遺跡　平成22年９月21日～平成22年10月15日

西後遺跡　平成22年８月20日～平成22年９月14日

5．開発面積及び調査面積

開発面積　12,000㎡

米塚遺跡　64㎡

西後遺跡　297㎡

6．調査組織

依 頼 者	松江市土木課			
主 体 者	松江市教育委員会			
事 務 局	松江市教育委員会		教育長	福島　律子
	〃	文化財課	課長	錦織　慶樹
	〃	〃　調査係	係長	赤澤　秀則
	〃	〃　〃	主任	後藤　哲男（事務担当者）
調査指導	島根県教育委員会　文化財課		企画員	池淵　俊一
実 施 者	財団法人松江市教育文化振興事業団		理事長	松浦　正敬
	〃	埋蔵文化財課	課長	大西　誠
	〃	〃　調査係	係長	中尾　秀信
	〃	〃　〃	専門企画員	門脇　誠也（事務担当者）
	〃	〃　〃	調査員	廣濱　貴子（調査担当者）
	〃	〃　〃	調査補助員	福光　能治

7．調査及び報告書の作成にあたっては、以下の方々に有益なご指導、ご教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。（敬称略）

間野大丞、伊藤徳広、稲田陽介

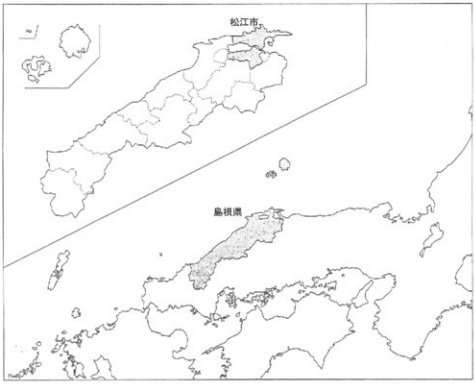
8．本書に記載した遺物の実測、浄書、遺構の浄書は以下のものが行った。

（実　測）　福光　能治、　飯野　正子、　廣濱　貴子

（浄　書）　福光　能治、　飯野　正子

9．本書に掲載した現場写真、遺物写真は廣濱貴子が撮影した。

10. 本書の執筆・編集は松江市教育委員会文化財課の協力を得て、廣濱貴子が行った。
なお、第5章　土壌分析は、渡邉正巳 氏（文化財調査コンサルタント）に執筆頂いた。
11. 本書における方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第Ⅲ系の値である。また、レベル値は海抜標高を示す。
12. 本書で使用した遺構番号は以下のとおりである。
SB･･･掘立柱建物跡　SK･･･土坑　SR･･･自然流路　P･･･柱穴
13. 挿図番号は通し番号とし、挿図、図版における遺物番号は遺構ごとに記載した。
14. 本書で使用した五輪塔の火輪の呼称は『谷ノ奥遺跡』八雲村教育委員会2002年の五輪塔各部の名称から抜粋した。
15. 出土遺物、実測図及び写真等は松江市教育委員会で保管している。



第1図　島根県・松江市位置図

本 文 目 次

第1章　調査に至る経緯 …… 1

第2章　位置と環境 …… 3

第3章　米塚遺跡
　第1節　調査の経過と概要 …… 6
　第2節　土層堆積状況 …… 6
　第3節　調査の成果 …… 8
　第4節　小　　結 …… 16

第4章　西後遺跡
　第1節　調査の経過と概要 …… 18
　第2節　土層堆積状況 …… 18
　第3節　調査の成果 …… 22
　第4節　小　　結 …… 26

第5章　土壌分析 …… 28
　米塚遺跡発掘調査において出土した耕作遺構について

挿 図 目 次

第１図　鳥根県・松江市位置図
第２図　開発範囲と調査位置図 …… 1
第３図　開発範囲と調査範囲図 …… 2
第４図　周辺の遺跡分布図 …… 5
第５図　米塚遺跡土層断面図 …… 7
第６図　第１遺構面出土遺物 …… 8
第７図　第１遺構面実測図 …… 9
第８図　第２遺構面実測図 …… 10
第９図　中世墓実測図 …… 11
第10図　中世墓出土遺物 …… 12
第11図　五輪塔各部の呼称 …… 13
第12図　第３遺構面出土遺物 …… 13
第13図　第３遺構面実測図 …… 14
第14図　遺構外出土遺物 …… 15
第15図　西後遺跡調査成果図 …… 19
第16図　西後遺跡土層断面図 …… 20
第17図　土層内出土遺物 …… 21
第18図　SB01実測図 …… 22
第19図　SB02実測図 …… 23
第20図　遺構外ピット出土遺物 …… 23
第21図　SK01実測図 …… 24
第22図　SR01実測図 …… 25
第23図　SR01出土遺物 …… 25
第24図　調査区平面及び試料採取地点 …… 28
第25図　試料採取地点断面図 …… 28
第26図　実景写真 …… 30
第27図　軟X線写真 …… 30
第28図　解析結果（地層境界・ラミナ・ブロック） …… 30
第29図　解析結果（軟X線写真と地層境界） …… 30
第30図　分析試料採取位置 …… 31
第31図　花粉ダイヤグラム …… 32
第32図　植物珪酸体ダイアグラム …… 32

表目次

表１　検鏡対象分類群 …… 29
表２　微化石概査結果 …… 31

図 版 目 次

図版１　米塚遺跡調査前風景（西から）
　第１遺構面西側完掘状況（南東から）
図版２　第１遺構面東側完掘状況（南西から）
　第３遺構面完掘状況（東から）
図版３　第２遺構面中世墓上層断面（南から）
　中世墓石出土状況（南から）
　中世墓完掘状況（西から）
図版４　第１遺構面出土遺物
　第２遺構面中世墓出土遺物（銭石）
図版５　第２遺構面中世墓出土遺物（火輪）
　第３遺構面出土遺物
　遺構外出土遺物
図版６　西後遺跡調査前全景（東から）
　西後遺跡完掘状況（南東から）
図版７　調査区北西側SB01完掘状況（北西から）
　SB01の南西側ピット完掘状況（南東から）
　調査区中央ピット完掘状況（北西から）
図版８　SB02完掘状況（北西から）
　調査区南東側ピット完掘状況（南から）
　SK01完掘状況（南東から）
図版９　SR01上層堆積状況（南東から）
　SR01遺物出土状況（南東から）
　SR01完掘状況（南から）
図版10　土層内出土遺物
　遺構外ピット出土遺物
　SR01出土遺物

第１章　調査に至る経緯

市道古志大野線は、宍道湖北岸を走る国道431号線北側の住宅沿いに位置し、松江市と出雲市を東西に結ぶ主要路線である。しかし、この路線には歩道はあるものの、一部区間は１車線で幅員が狭く、特に朝夕の通勤時間帯には交通量が増加し、安全性が保たれない状況となっていた。また沿線には小学校・幼稚園があり、通学路でもあることから早急な整備が必要であった。

このことから、松江市において道路改良事業が計画され、事前に協議を受けた松江市教育委員会文化財課は該当地には周知の遺跡は存在しないものの、未調査地であることから、分布・試掘・確認調査依頼書の提出を求める回答をした。

平成18年８月25日調査依頼書が提出され現地調査を行なった結果、試掘調査の必要な箇所があることを回答した。

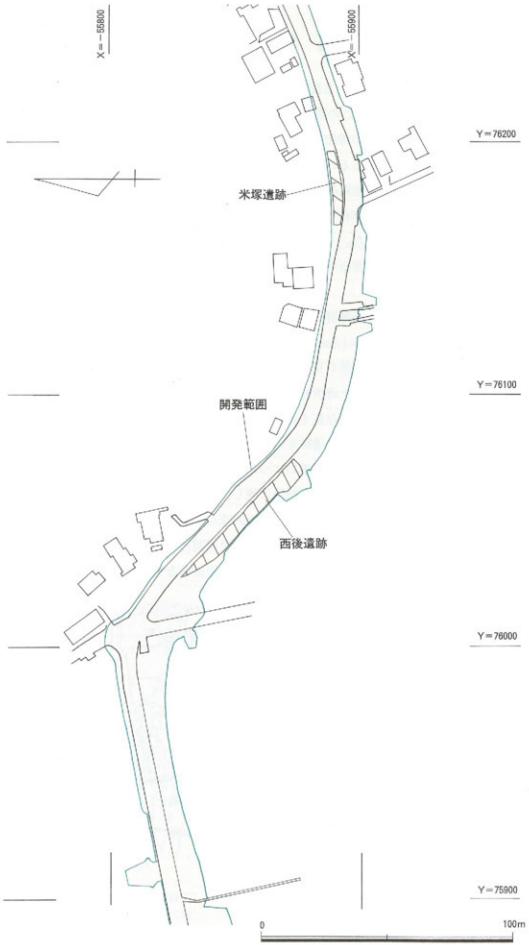
平成21年になり、松江市により用地買収が完了した場所の試掘調査を11月９日から５日間をかけて実施した。試掘調査は６区間に３×1.5ｍを基本としたトレンチを８本設定し行ない、さらに３本を追加した。この結果、２区画から遺跡が発見された。一箇所からは土坑を検出し、この脇に五輪塔の火輪が落ち込んだ状態で出土し、中・近世の墓壙と考えられた。もう一箇所は弥生土器、黒曜石石片を検出し、弥生時代の住居跡が付近に存在するものと考えられた。

それぞれ付近の字名から、中・近世の遺跡を米塚遺跡、弥生時代の遺跡を西後遺跡と命名した。

遺跡が確認されたことを受け、遺跡の取扱いについて松江市教育委員会と松江市土木課で協議を行なったが、工事計画の変更は困難であるとの結論に達し、平成21年12月11日両遺跡の遺跡発見の通知が提出され、島根県教育委員会から工事着手前に発掘調査を実施する旨の勧告がなされた。

松江市教育委員会は平成22年度において両遺跡の全面発掘調査を行なうこととし、財団法人松江市教育文化振興事業団において平成22年８月から10月末まで発掘調査を実施した。

第２図　開発範囲と調査位置図（S＝１：25,000）



第３図　開発範囲と調査範囲図（S ＝ 1 : 1,500）

第2章　位置と環境

米塚遺跡、西後遺跡は松江市街地から北西側、松江市西谷町下組に所在する。両遺跡は市街地から西に向かって延びる市道古志大野線に隣接している。両遺跡は北山山系の朝日山から南東方向に派生する丘陵の先端部分に位置し、南側には広大な宍道湖西岸の穀倉地帯が広がっている。東側には『出雲風土記』に見える「佐太水海」や江戸時代、清原太兵衛によって開削された佐陀川が流れている。佐陀川が開削されても当地域は台風の度に水害に見まわれることが多く、昭和30年頃までに盛土造成や圃場整備がおこなわれ、現在では松江地域でも有数の早場米地帯となっている。

本調査区周辺、特に古曽志町周辺は古曽志大谷古墳群（13）や丹花庵古墳（9）などの古墳や横穴墓などが多く存在する地域である。それ以前の遺跡は少なく、古曽志平廻田遺跡（14）、古曽志清水遺跡（16）から遺構に伴わないが旧石器時代のナイフ形石器や台形様石器が出土し、その頃から、当地域において人々の暮らしがあったことを窺わせた。古曽志清水遺跡から出土したナイフ形石器は横長剥片に加工を施したもので、瀬戸内地方の技法の特徴を有し他地域との交流を示す資料である。

縄文時代の遺跡としては、竪穴住居遺構が検出され、小形石匙等が出土した古曽志善坊遺跡（12）、縄文土器が採集された後谷遺跡（17）や宍道湖湖底遺跡（25）が知られている。

また、弥生時代の遺跡としては、古曽志清水遺跡があり、この遺跡では加工段や柱穴、ピット、土壙が検出され弥生土器が出土している。

古墳時代の遺跡は多く、特に調査区周辺には多くの中期古墳が存在する。それ以前の前期古墳としては、釜代古墳群（18）、北小原古墳群（20）が存在する。釜代1号墳の主体部からは内行花文鏡や勾玉、数多くのガラス小玉が出土している。また、北小原3号墳からは珠文鏡が出土している。

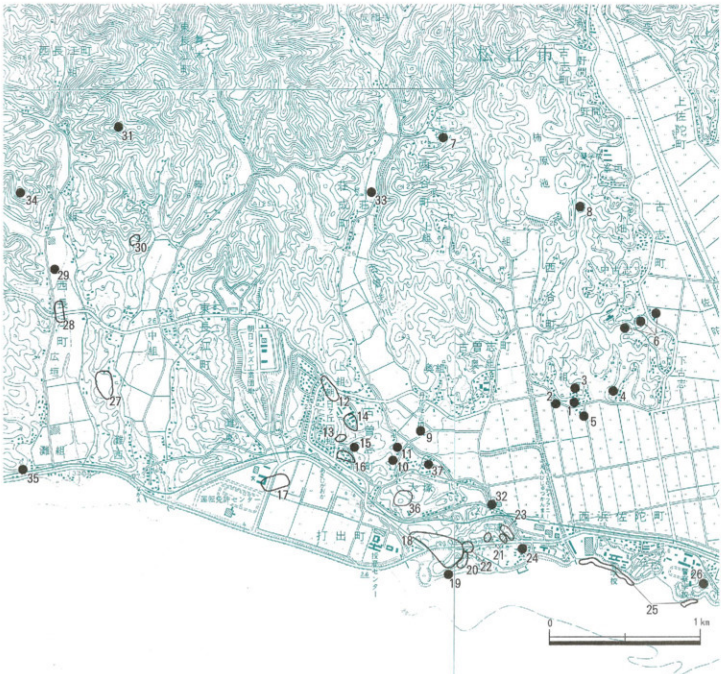
中期の古墳としては国指定遺跡になっている丹花庵古墳が有名である。1辺47m、二段築造の方墳で長持形石棺が置かれ、その羨石は斜格子文で装飾されていた。西後遺跡から西側に望む古曽志大谷古墳群は前方後方墳1基、方墳3基の古墳群である。なかでも1号墳は全長45.5m、二段築造で葺石をもち埴輪列が検出された古墳で、宍道湖を眺望できる丘陵上に造られている。他に割竹形石棺や革綴短甲片が出土した大塚荒神古墳（37）や1辺47mの円墳のある古曽志大塚古墳群（36）、ちょう塚古墳群（6）など多くの中期古墳が築造され、宍道湖北岸地域に強大な勢力があったことを窺わせる。後期古墳としては神主塚古墳（32）が知られる程度であり、横穴墓が多く造営されるようになる。整正家形の玄室内に2基の石棺を並べ、玄門を「廾」状の板石で閉塞した北小原横穴群（22）や人骨や直刀が出土した筆ノ尾横穴群（30）、他に寺津横穴群（21）、寺津停留所裏横穴群（24）などが知られている。

奈良時代の遺構としては、古曽志平廻田遺跡から桁行3間×梁間2間の集会所か倉庫のような建物跡が検出されている。他に奈良時代の遺跡として注目されるのが、西長江町の常楽寺瓦窯跡（35）である。この窯跡から採集された瓦には、出雲国分寺や四王寺の瓦があり、意宇平野との結びつきを窺わせる。また、時期は下るが古曽志平廻田遺跡からは須恵器窯跡が3基発見され、10世紀代と考えられる坏や皿が多く出土している。西長江の谷部にはかつての条里制の跡、西長江条里制遺跡（28）が残っていたが、今は消滅している。

中世の遺跡も少なく、造栄寺遺跡（11）の古墓や山城だけである。米塚遺跡の北側丘陵、民家の宅地内には、通称屋敷古墳と呼ばれる古墳があり、その上には聖塚（3）がある。ここにある五輪塔は

空風輪がなく、火輪、水輪、地輪を合わせると1.8mほどになる大きなものである。時期は不明であるが、中世以降のものと考えられる。山城としては、秋鹿類尾城の出城であった西長江要害山城跡（34）や雑賀入道ヨシモトの居城であった伝えられる二つ山城跡（31）、西浜佐陀町満願寺裏山の満願寺城跡（26）がある。満願寺城跡は尼子氏に仕えた湯原信綱が築城し、戦国時代には毛利元就の陣所にもなっていたと伝えられる城である。宍道湖を眺望できる丘陵にあり、宍道湖を監視する重要な拠点であったと考えられる。

【参考文献】
島根県教育委員会『古曽志遺跡群発掘調査報告書』　1989年
島根県教育委員会『島根県中近世城館調査報告書＜第2集＞出雲・隠岐の城館跡』　1998年
島根県　「月花庵古墳」『島根県史蹟名勝天然記念物調査報告』第二回　1925年
松江市教育委員会（財）松江市教育文化振興事業団　『竪代1号墳外発掘調査報告書Ⅰ』　1994年
松江市教育委員会（財）松江市教育文化振興事業団　『寒ノ尾横穴群発掘調査報告書』　1995年
松江市教育委員会（財）松江市教育文化振興事業団　『北小原古墳群発掘調査報告書』　2000年
鹿原福市　「町村誌」『八束郡志』　昭和48年
古江まちづくり推進委員会『ふるさと古江』　1990年



1．米塚遺跡
2．西後遺跡
3．聖塚
4．西谷遺跡
5．光徳寺遺祉
6．ちょう塚古墳群
7．牛切古墳
8．茶臼山古墳群
9．月花庵古墳
10．古曽志幸神遺跡
11．道栄寺遺跡
12．古曽志善坊遺跡
13．古曽志大谷古墳群
14．古曽志平廻田遺跡
15．古曽志寺廻田古墳群
16．古曽志清水遺跡
17．後谷遺跡
18．釜代古墳群
19．釜代横穴
20．北小原古墳群
21．寺津横穴群
22．北小原横穴群
23．寺津停留所裏横穴群
24．寺津古墳群
25．穴道湖湖底遺跡
26．満願寺城跡
27．東長江古墳群
28．西長江地区条里制遺跡
29．岩屋古墳
30．筆ノ尾横穴群
31．二つ山城跡
32．神主塚古墳
33．畑前遺跡
34．西長江要害山城跡
35．常楽寺瓦窯跡
36．古曽志大塚古墳群
37．大塚荒神古墳

第４図　周辺の遺跡分布図（Ｓ＝１：25,000）

第3章　米塚遺跡

第1節　調査の経過と概要

米塚遺跡は、北側から南側に向かって延びる丘陵端部に位置し、現況は畑地である。現在北側も畑地であるが、以前は民家が建っていたところである。

東西25.5m、南北1.5～3.3mの細長い調査区で、はじめに、調査区西側にトレンチを掘り、土層を確認してから重機で耕作土を除去した。掘り下げていくと南北方向に数条の溝状遺構が検出され、この面を第1遺構面として調査をおこなった。試掘調査時に五輪塔の火輪が出土した中世墓も、この時点では第1遺構面と考えていた。第1遺構面の調査を完了し、更にその下の遺構面、地山面の調査を実施した。この面からは数穴のピットを検出した。しかし、調査指導でこの中間部にも遺構面があることが確認され、土層観察の結果、第1遺構面の遺構と考えていた中世墓はその中間遺構面の遺構であると思われた。この中間遺構面を第2遺構面、地山面を第3遺構面とした。セクションで第2遺構面と確認できたものは中世墓の他にピット3個のみであったが、第3遺構面とした遺構のなかにも第2遺構面から掘り込まれた遺構が存在する可能性は捨て切れない。3面の調査終了後、埋め戻しをおこなった。

第2節　土層堆積状況（第5図）

表土標高は約2.9mで、地表から0.3～0.4mは現在の耕作土である。調査区北壁に水穴が多数みられ、雨が降ると周囲の水が集まってくるようなところであった。

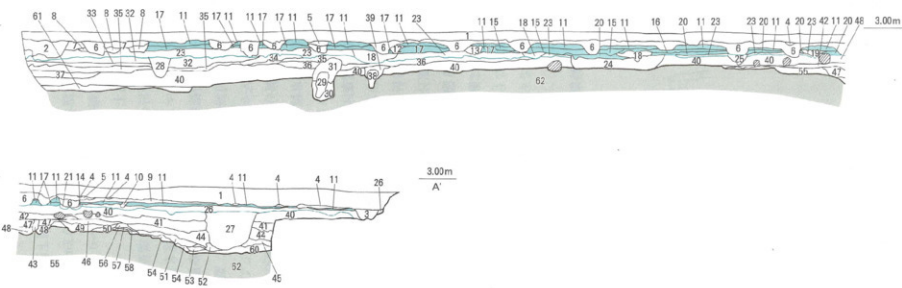
土層断面の第11層（にぶい黄褐色土）は畝土（旧耕作土）で、第6層（黄褐色土）が落ち込んでいる溝状のところは畑の畝間と考えられた。第6層は新しい堆積土で陶磁器や丸釘、ガラスが出土している。第16、20層はややしまりのあるにぶい黄褐色で畑の床土である（文化財調査コンサルタント渡邊氏の御教示による）。第15～17層は地山の黄色土をブロック状に含む土層で、畑を造成する際の客土と考えられた。

中世墓が掘り込まれた第2遺構面は、第40層（褐灰色土）上面である。この第40層は調査区中央から西側では地山（第62層、黄白色土）上に堆積し、西に向かって下っている。そのため同じ遺構面として考えにくく、中世墓検出の遺構面レベルから考えると第32、34～36層上面となり、また、この面からピットが掘り込まれていることなどからこの面を第2遺構面とした。

第26層（暗灰色粘土）は中世墓上の部分的な土層で、中世墓上に盛られた土層の可能性も考えられる。中世墓の土層については後述する。

第40層からは土師器、須恵器が出土している。第41層～60層は、東側の斜面から落ち込み部分に堆積した土層で、遺物は第51層から須恵器の細片が出土した程度である。

第3遺構面は第62層（黄白色土、地山）である。この面は調査区中央から東西両方向に向かって下っており、標高1.4～2.1mを測る。この遺構面からは数穴のピットが検出されたが、後世の土砂の流入によって削平された可能性も窺われる。



1 黒褐色土（耕作土）
2 明黄褐色土
3 暗灰色土
4 黄色土
5 にぶい黄褐色土
6 黄褐色土（畝間土）
7 黄褐色土（炭多い）
8 橙色土と黒褐色土の混合土
9 黄褐色土
10 淡褐色土
11 にぶい黄褐色土（畝土）
12 淡灰褐色土
13 にぶい黄褐色土
14 褐色土
15 明黄褐色土（黄・橙色土多）
16 黄褐色土（黄・橙色小ブロック多）
17 淡灰褐色土
18 灰褐色土（黄色土多）
19 灰褐色打ち（炭多）
20 灰茶色土（畑の形成土）
畑の形成土

21 淡灰色粘質土
22 褐灰色土
23 淡茶灰色土（やや砂質）
24 灰褐色土（にぶい黄褐色土多）（土坑埋土）
25 淡灰褐色土
26 暗灰色粘土
27 中世墓埋土
28 暗灰色褐色土（ピット埋土）
29 暗灰色粘質土
30 灰黄色土（ピット埋土）
31 灰褐色土
32 暗灰褐色土
33 黒褐色土
34 にぶい淡黄褐色土
35 にぶい黄灰色土
36 褐灰色土
37 黒褐色土
38 褐色土
39 褐灰色土
40 褐灰色土（やや砂質）

41 褐灰色土
42 褐灰色土（黄・橙色ブロック含）
43 暗褐色土
44 褐灰色土（黄色ブロック多）
45 褐灰色土（黄色ブロック含）
46 淡褐灰色土
47 黒褐色土
48 黒黄色土
49 暗灰褐色土
50 にぶい黄灰色土
51 灰黒色土
52 暗灰色土
53 灰色土
54 黒灰色土
55 黒色土と黄色土の混合土
56 にぶい黄灰色土と黒色土の混合土
58 にぶい淡褐色土
59 暗褐色砂質土
60 黒灰色粘質土
61 灰黄色砂質土
62 黄白色土（地山）

水穴
第1面（畑）の形成土
第2面
第3面および地山

0　4m

第5図　米塚遺跡土層断面図（S＝1：80）

第３節　調査の成果

１．第１遺構面（第７図）

第１遺構面は第６層を取り除き、第11層上面で検出した畑として利用された遺構面である。遺構としては畝が13条確認され、その規模は幅0.2m～1.2mを測り、すべてやや北西から南東方向に向いていた。また畝間は幅0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mを測る。第11層の畝土からは磁器や焼きの良い土師質の土器、釘が出土している。

第５章の土壌分析の花粉分析結果から、調査地及び周辺で稲や蕎麦、綿などが栽培され、他にヒユ科、ナス科、ソラマメ属などの栽培種が自生または栽培されていた可能性が指摘された。また、プラントオパール分析結果から稲の植物珪酸体が多量に検出された一方で、水田雑草がほとんど検出されず、稲は陸稲の可能性も指摘された。しかし、調査地周辺が水田地帯であること、また、八束郡誌や地元の郷土誌、人々の言い伝えに陸稲栽培をしていたという事実はなく、その可能性は低いものと思われた。ただ、部分的に栽培された可能性も否定できない。他にスギやマツの花粉が多く検出された。マツ属の花粉が卓越し、調査区背後の丘陵にはアカマツあるいはクロマツを主体とする薪炭林が分布していたと考えられた。またスギ花粉も高率で出現し、調査区周辺にスギの天然林があったと考えられた。現在、調査区北側丘陵には民家が多いが、第１遺構面の時期にはマツやスギが多く存在するところであり、現在と同じように畑であったと推測される。

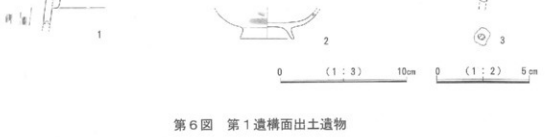
今回の土壌分析は、発掘調査区内の１箇所における結果である。この結果が湖北地区全体を示すものではなく、部分的な結果としてとらえたい。

出土遺物（第６図）

１、２、３は第11層から出土した遺物である。１は不明遺物で粘土を貼り付けて焼かれたもので、植木鉢のようなものと思われる。２は染付けの磁器碗で、江戸時代後半（19世紀後半）頃のものである。３は角釘である。

時期

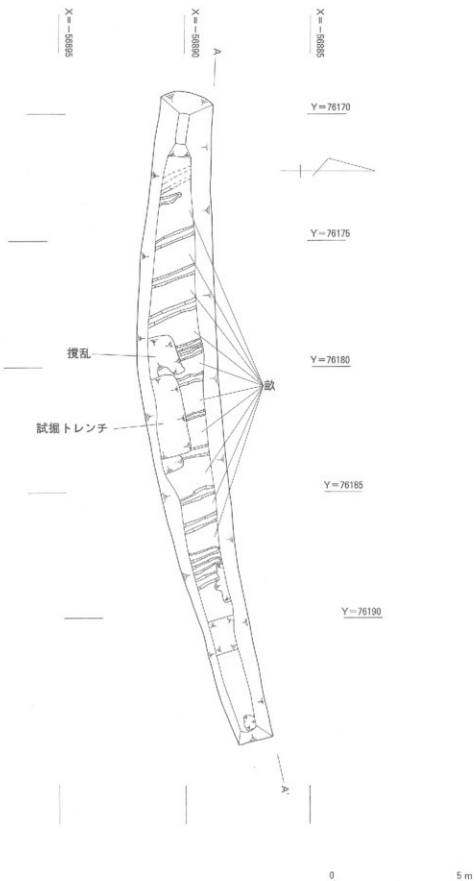
土壌分析の結果、出土遺物から考えると、幕末から近代以降の遺構面の可能性が高い。



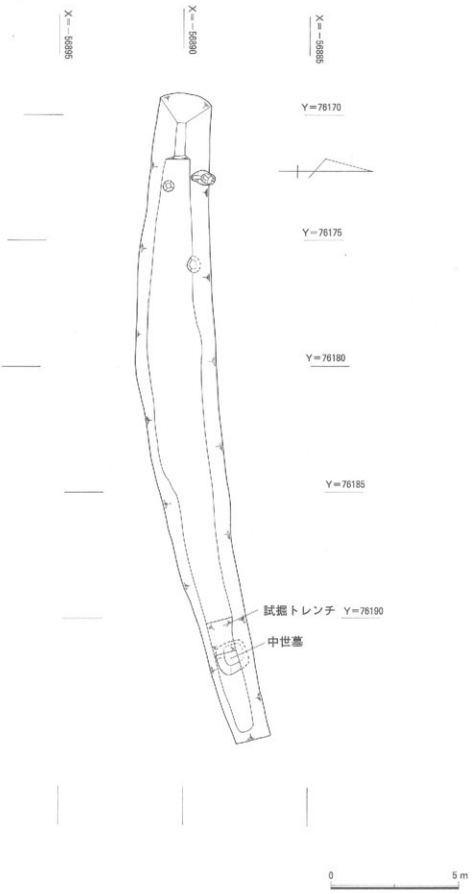
第６図　第１遺構面出土遺物

２．第２遺構面（第８図）

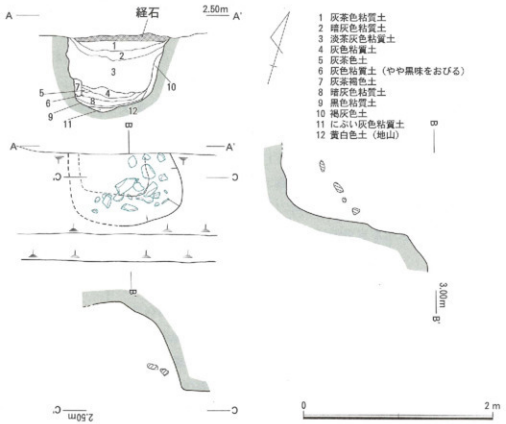
第２遺構面は、前述したように、第１遺構面、第３遺構面の調査後、調査指導の際に土層観察によって確認された遺構面である。標高約2.4mの遺構面で、３個のピットと中世墓を検出した。ピットは最大径0.4～0.6m、深さ0.6mを測る。遺物は出土していない。



第７図　第１遺構面実測図（Ｓ＝１：150）



第８図　第２遺構面実測図（S＝１：150）



第９図　中世墓実測図（S＝1：40）

中世墓（第９図）

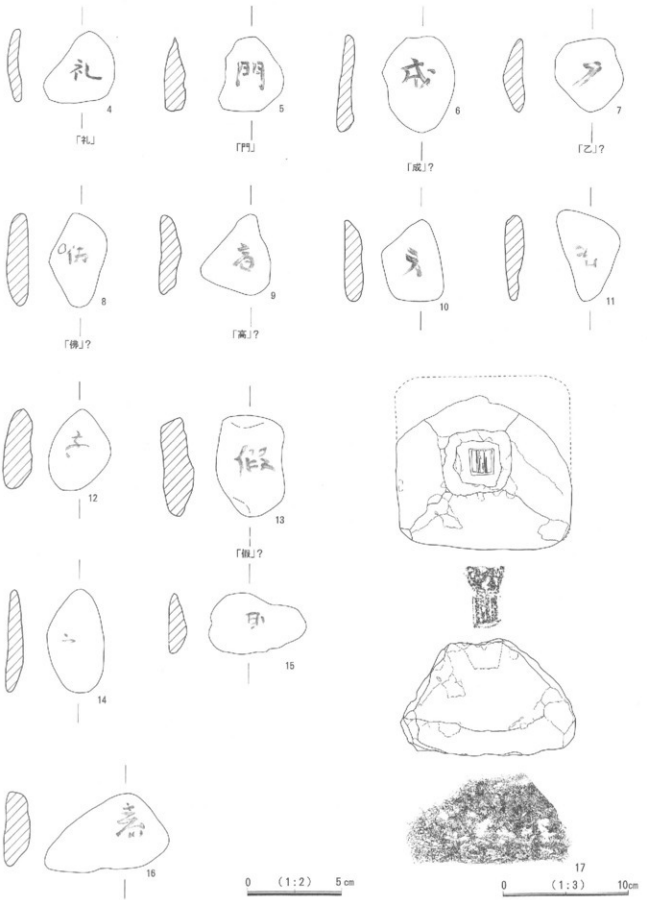
調査区東側で検出した遺構である。試掘調査時に土壙の脇から五輪塔の火輪が出土している。遺構の西側は試掘時に掘削され、また調査範囲が限られていたため全容を知り得ることはできなかった。平面形隅丸方形の土壙で、大きさは土層断面などから幅1.1m、深さ0.83mを測る。

土層断面第１、２層（灰茶色粘質土、暗灰色粘質土）は厚さ0.28mを測り、土層内からは大きさ0.1～0.2m程の角礫が土壙の中心部に向かって落ち込んだ状態で出土した。また、第１層の上半からは経石が多数出土している。第３層は厚さ35cmの土層で棺内の流入土である。棺の痕跡はみられなかったが、第10層（褐灰色土）は棺外の埋め土と考えられた。西側に同じような棺外の埋め土の痕跡はみられず、おそらく棺内と棺外にあまり隙間がなかったため、棺が朽ちたときに土層が混じり合いわからなくなってしまったのではなかろうか。第８、９層（暗灰色粘質土、黒色粘質土）は粘性の高い土層であった。

土層観察からすると、棺を設置後、埋め土や盛土をし、その上に角礫を置き、そしてその上に五輪塔を設置し、周辺に経石を置いたと考えられた。角礫が棺の中心部に向かって傾斜しているのは、棺の腐食によって埋め土が沈下した結果であって、第３層が厚いということは、棺の上にある程度盛土があり、塚のようになっていたと推測された。

出土遺物（第10、11図）

４～16は経石で、河原石の円礫に墨で経文の文字を一石に一字ずつ書いたものである。経石のなかには多字一石のものもあるが、米塚遺跡から出土した経石は一字一石のものばかりであった。墨書文



第10図　中世墓出土遺物

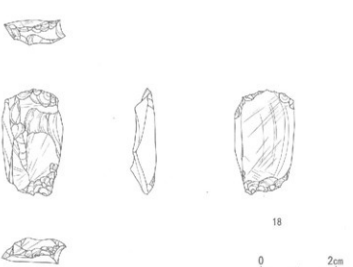
字が消えてしまった経石もあるであろうが、最初から書かれていない円礫もあったと思われる。赤外線を照射しても読めず、目視の方が読めたものもあり、実測には目視できた部分のみを記載したものもある。全部で54個の経石が出土し、何らかの文字が書かれていると思われたのは13個、そのうち判読できたのは２文字であった。４は「礼」、５は「門」と判読できるが、６「成」、７「乙」、８「佛」、９「高」、13「假」は判読される可能性として記述した。これらの文字の筆跡は「礼」のように線は細いが丁寧に書かれたもの、「成」や「乙」のように楷書でとめ、はらいをしっかりと書いたもの、「高」のようにややくずし字で書いたものなど若干の違いが認められ、複数の人によって書かれた可能性が考えられた。円礫の大半は流紋岩で、大きさは約３～５㎝、厚さ１～２㎝、重さ10～50ｇを測る。

第11図　五輪塔各部の呼称

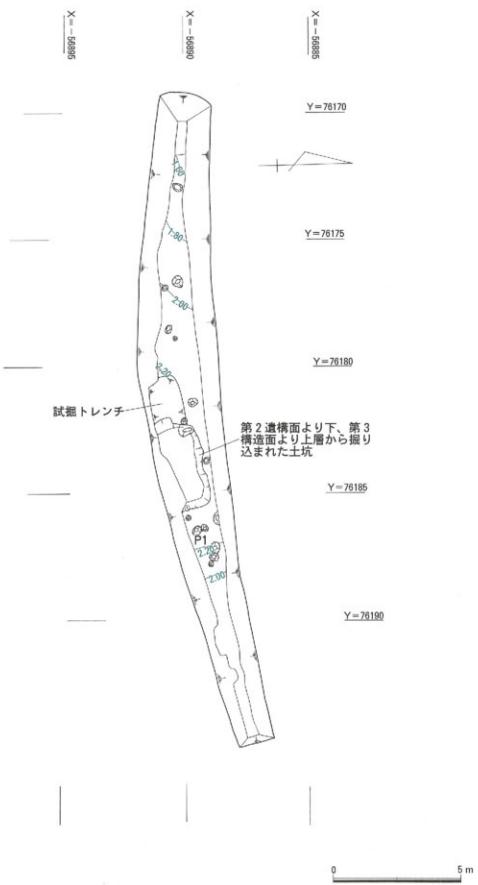
17は五輪塔の火輪である。石材は白色の凝灰岩である。軒から下面にかけて一部欠損しているところもあるが、土中に埋まっていたため表面はあまり風化していない。高さ19.0㎝、上面幅11×10㎝、残存する下面幅は23.2×11㎝、重さ9.96kgを測り、小型品である。柄穴は７×７㎝の四角形で、底面とその四周に浅い溝が掘られている。棟線は緩やかで、軒は4.0～5.0㎝前後の厚さで中央と端部がほぼ同じである。軒端はやや斜めで、軒の上の線と下の線とも平行に反り、下面も反っている。表面は部分的に磨かれた痕跡がみられる。梵字は四面とも彫られていない。

この火輪（空）はこのように小型品であること、来待石を使用していないこと、形態から15世紀頃のものと考えられた。しかし、現在、五輪塔の明確な編年はなく、検討を要する。

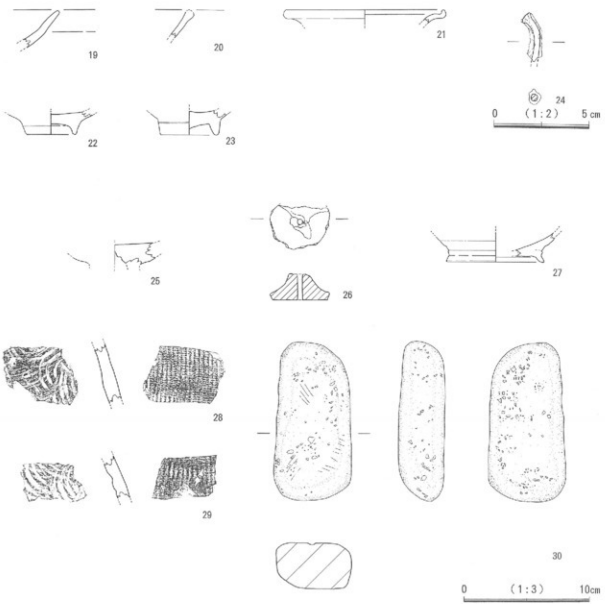
土層観察をおこなったが調査区内で同じような中世墓は発見されなかった。この遺構がどのような性格のものか明確なことはいえないが、調査区南側には以前、光徳寺という寺が存在し、その寺域内の墓の可能性も考えられた。また、調査区周辺の住民の言い伝えによれば、昔は家の敷地内に埋葬し、お墓を作っていたという話があり、その埋葬形態のひとつなのかもしれない。



第12図　第３遺構面出土遺物（Ｓ＝１：１）



第13図　第３遺構面実測図（S＝1：150）



第14図　遺構外出土遺物

５．第３遺構面（第12、13図）

第３遺構面は地山面の遺構である。この遺構面は幅１～２ｍ程の狭い遺構面で、十数穴のピットを検出した。ピットの大きさは0.2～0.6m、深さ0.1～0.5mを測り、大きさも深さも様々であった。埋土や底面レベルが同じ柱穴もあったのだが、建物跡を復元することはできなかった。ピット内から出土した遺物は少なく須恵器の細片や石製品であった。第13図の24はＰ１から出土した黒曜石の楔形石器で、両極剥離痕がみられる。

第３遺構面は前述したように調査区中央から東西方向に向かって傾斜し、後世において削平された可能性も考えられる。時期を明確にできるような遺物は出土していないが、遺構面直上から須恵器の細片が出土していることから、５世紀の中頃以降の遺構面と推測される。

調査区中央にみられる土坑は、東西3.75m、南北1.4m、深さ約0.3mを測る。土層断面から東側は第40層上面から掘り込まれているが、西側は第３遺構面より上層の第36層から掘り込まれ、第３遺構面より上面の遺構と思われる。出土遺物は瓦片や陶磁器、土師器の細片が出土し、近世以降の土坑と考えられた。

６．遺構外出土遺物（第14図）

米塚遺跡から出土した遺物は少なく、また細片で図化できるものは少なかった。図化できたものを遺構外遺物として記載した。

19～24は第６層から出土した遺物である。19は土師質土器である。20は玉縁碗の口縁でやや端部を欠いている。中国製の白磁で平安時代末頃のものと思われる。21は肥前系陶器の溝縁皿で灰釉が施釉され、17世紀第２四半期頃のものである。22、23は肥前系磁器碗の高台で、畳付に砂が付着し、高台外面に１条の圏線が巡る。17世紀後半頃のものである。24は角釘である。15～30は第３遺構面直上の第40層（褐灰色土）から出土した遺物である。25は土師器、高坏の杯部である。26は防錘車である。底部最大径4.8cm、高さ2.1cm、中央に0.4cmの穴があいている。底面は黒変し、穴の回りには同心円状の擦痕がみられる。27は須恵器の坏底部で高台は低く、やや外側にひらいている。９世紀頃のものと思われる。28、29は須恵器の甕片、30は磨石である。

第４節　小結

今回の調査では、畑の畝と中世墓、ピットを検出した。畑の畝はそれほど古いものではなかったが、幕末から近代において、この地で人々がどのような植物を栽培し、生活していたのか垣間見ることができた。第１遺構面上の土層からは平安時代末頃と17世紀頃の肥前系陶磁器や中国白磁が出土している。平安時代末頃の白磁は一般に高級品と言われ、付近にこれらを利用した豪族の存在が窺われた。また、17世紀頃の陶磁器から近世の遺構の存在も窺われた。今後、調査区周辺の発掘調査によって中近世の遺跡が発見されれば、城下町をとりまく農村の一端を解明できるものと思われる。

第２遺構面で検出した中世墓は、遺構全体を調査することは出来なかったが、経石や五輪塔の火輪が出土した。経石も墨書文字が風化していて、全ての文字を明確にできなかったのは残念である。しかし、当地域においてこのような中世墓が発見できたことは有意義であった。

松江市湖北地域における中世の遺跡は少ない。本調査区周辺で五輪塔が確認されているのは、第２章の位置と歴史的環境で取り上げた聖塚、少し離れているが松江市大野町の西光寺裏山古墓群ぐらいである。西光寺裏山古墓群からは五輪塔22基、宝篋印塔３基が発見され、室町時代以降のものと考えられている。また、経石が出土した遺跡としては西光寺近くの惣源寺経塚がある。この経塚の年代は不明であるが、「佛」や「路」、「音」などの書かれた円礫が見つかっており、西光寺裏山古墓群から検出された中近世墓に関係するものと考えられている。今回出土した火輪も15世紀頃のものと考えられ、広義の意味で言えば、同時期の遺跡と考えられるのではなかろうか。

また、先にも述べたが、調査区の道路を挟んだ南側には光徳寺遺址がある。ここは明治６年まで米塚山光徳寺と唱えていたところであるが、廃寺になり現在は一堂のなかに尊像のみが置かれている。この光徳寺がいつ創立され、またどのようなお寺であったかは不明である。今回発見された古墓が光徳寺に関係あるもので、調査区がその寺域内であった可能性も窺われた。

今回の調査で出雲地方では調査例の少ない中世墓が発見されたことは、古墳時代の遺跡が多いこの地域において、貴重な埋葬資料となりえたであろう。

【註】

註１　島根県教育委員会文化財課
　　企画員　間野大丞氏のご教示による。

【参考文献】

大野公民館『続　大野郷土誌』　昭和53年
古江まちづくり推進委員会『ふるさと古江』　1990年

遺　物　観　察　表

土　器

挿図番号	出土層位・遺構面	種類	器種	法量(cm) 口径	底径・頭部径	器高(残高)	色調 内面	外面	調整 内面	外面	形與文様	備考
6-1	第1遺構面	不明	不明	—		3.1	明褐色	明褐色	ハケ目ナデ	ナデ		
6-2	第1遺構面	磁器	小杯	—	底径 3.9	2.0	白色	白色				江戸後期の肥前染付
14-19	第6層	土師質土器	皿	—	—	3.1	にぶい灰褐色	にぶい灰褐色	回転ナデ	回転ナデ		
14-20	第6層	磁器	下線碗	—		2.3	にぶい白色	にぶい白色				12世紀末頃
14-21	第6層	陶器	溝線皿	12.6	—	1.2	緑釉	緑釉				17世紀第2四半期
14-22	第6層	磁器	底部		底径 3.8	1.9	青灰白色	青灰白色				染付け高台端部に砂付着
14-23	第6層	磁器	底部	—	底径 4.6	2.0	青白色	青白色				染付け高台端部に砂付着
14-25	褐灰色土	土師器	高杯	—	—	1.8	橙色	橙色	風化により不明	風化により不明		
14-27	褐灰色土	須恵器	高台付坏		底径 7.6	2.4	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ	回転ナデ		
14-28	褐灰色土	須恵器	甕又は壺	—	—	4.9	灰色	灰色	当て具痕	タタキ痕		
14-29	褐灰色土	須恵器	甕又は壺	—	—	3.4	灰色	灰色	当て具痕	タタキ痕		

土製品

挿図番号	出土層位・遺構面	器種	法量(cm) 底部最大径	高さ		重量(g)	色調	備成
14-26	褐灰色土	紡錘車	4.8	2.1		59.42	赤褐色(黒褐色)	良好

鉄製品

挿図番号	出土層位・遺構面	種類	法量(cm) 最大長	最大幅		重量(g)	材質	備考
6-3	第1遺構面	角釘	3.6	1.1		4.29		
14-24	第6層	角釘	2.6	0.6		1.72		

石製品

挿図番号	出土層位・遺構面	種類	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	材質	備考
12-18	第3遺構面(P1)	模形石器	2.8	1.6	0.6	3.48	黒曜石	
14-30	褐灰色土	砂石	12.8	6.1	3.8	481.37		

経　石

挿図番号	出土層位・遺構面	種類	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	重量(g)	材質	備考
10-4	中世墓	経石	3.7	3.8	0.7	10.66	流紋岩	礼
10-5	中世墓	経石	3.8	3.3	1.1	13.82	流紋岩	門
10-6	中世墓	経石	5.0	3.7	0.9	21.16	流紋岩	成？
10-7	中世墓	経石	3.8	3.7	1.1	17.63	流紋岩	乙？
10-8	中世墓	経石	4.9	3.8	1.4	19.39	流紋岩	徳？
10-9	中世墓	経石	4.2	3.7	1.4	18.21	流紋岩	高？
10-10	中世墓	経石	3.1	4.2	1.1	19.19	流紋岩	
10-11	中世墓	経石	3.1	5.0	1.1	19.69	流紋岩	
10-12	中世墓	経石	4.3	3.1	1.6	23.58	流紋岩	
10-13	中世墓	経石	5.1	3.5	1.4	39.14	流紋岩	假？
10-14	中世墓	経石	5.4	3.9	0.8	15.54	流紋岩	
10-15	中世墓	経石	5.0	3.2	1.0	16.82	流紋岩	
10-16	中世墓	経石	6.6	3.9	1.8	47.57	流紋岩	

五輪塔（火輪）

挿図番号	出土層位・遺構面	上面部(cm)	軒幅(cm)	下面幅(cm)	高さ(cm)	枘穴平面形	枘穴上縁幅(cm)	枘穴深さ(cm)	幅・高さ(cm)	重量(kg)	残存状況	石材
10-17	中世墓	11.0×10.0	残存27.8×24.5	残存33.2×11.0	19.0	方形	7.0×7.0	4.2		9.96	部欠損	

第４章　西後遺跡

第１節　調査の経過と概要（第15図）

西後遺跡は、北から南に向かって延びる丘陵の端部に位置し、東西70m、南北３～７mの細長い調査区である。調査区の南側にはコンクリート壁があり、南東側には幅２mほどのコンクリートの排水路が埋置されていた。現況は荒蕪地であるが以前は畑地であったところである。重機によって表土掘削をおこない、西側に土層確認のトレンチ掘りした結果、地表遺面から１～２m下で遺構面である黄白色の地山が確認された。遺構面まで深く、調査期間や廃土処理など検討した結果、重機によって遺構面近くまで掘り下げ、遺構の検出をおこなった。遺構面は場所によっては南側のコンクリート壁より深く、サポートをすることによって安全を確保し、調査を進めていった。その結果、掘立柱建物跡２棟（SB01、02）、土坑１基（SK01）、自然流路１条（SR01）、ピット群を検出した。

第２節　土層堆積状況（第16図）

表土標高は2.9～3.7mを測り、表面から0.3～0.4mは畑の耕作土である。調査区南東側には電柱があり、盛り土や攪乱されたところがみられた。遺構面は、SB01を検出した北西側は平坦、試掘トレンチ周辺はやや高く、調査区中央と南東側は低くなっていた。全体的に凸凹し、山際線も蛇行し丘陵端部の地形を呈していた。

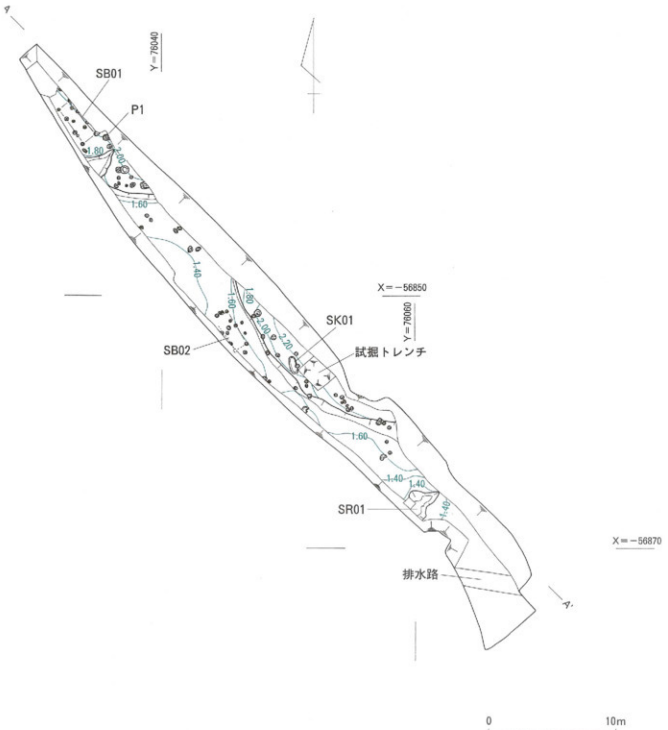
第１～28層は陶磁器や瓦、ガラスなどを含み、近世以降の堆積土や攪乱土、盛土である。調査区中央の堆積土第34層（黒褐色土）からは弥生土器の底部、頸部、須恵器の高台付坏などが出土し、高台付坏から９世紀以降の堆積土と考えられた。第52層（暗灰色粘質土）からは弥生土器や土師器、第53、54、55層（灰黄色粘質土、黒黄色土、黒黄色粘質土）からは縄文土器、弥生土器が出土している。本調査区の地山面は、弥生時代頃にはこのような地形を呈し、弥生土器を含む土層や土師器や須恵器を含む土層が堆積し、その後近世以降の土層が堆積したと考えられた。

土層内出土遺物（第17図）

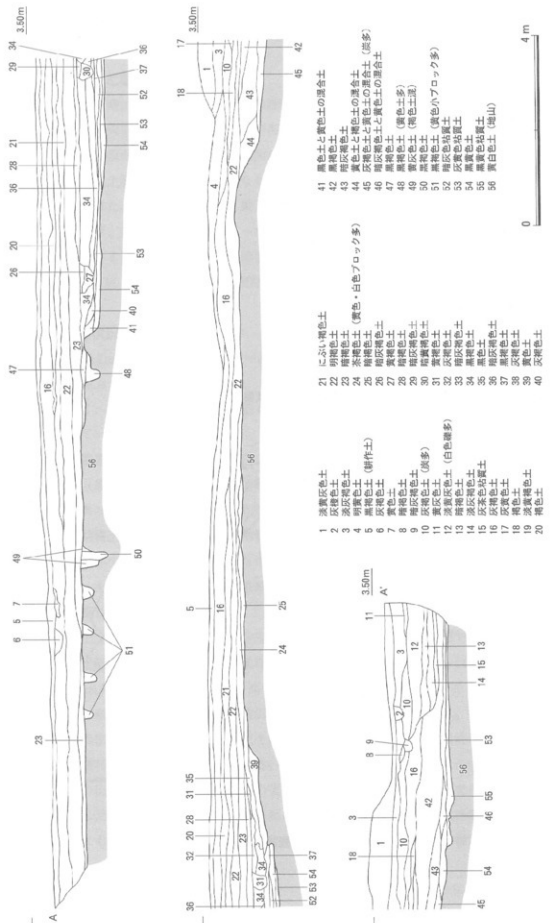
１～10は第34層出土遺物である。１、２は弥生土器の甕の頸部、３、４は底部である。３の底部外面には、焼成前に土器が置かれた時についた植物の茎ような痕跡がみられる。５は坏の杯部、６は口径14.5cm、高さ5.6cmを測る高台付坏である。高台が低く、坏部が直線的にのびるもので９世紀以降のものである。７は直口壺の口縁、８～10は角釘で７世紀以降のものと思われる。

11～14は第52層の出土遺物である。11は弥生土器の頸部、12、13は底部、14は注口土器である。15は高坏の坏部で古墳時代中期頃のものと思われる。

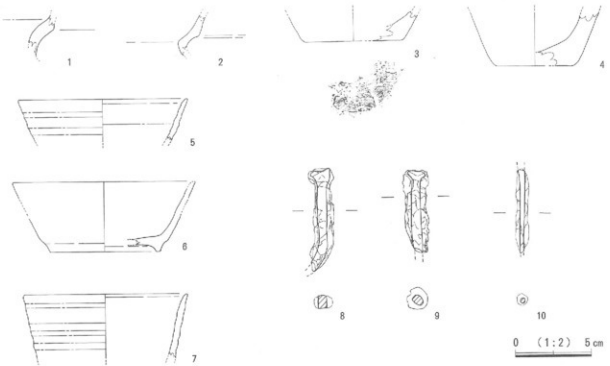
16～18は第53層の出土遺物で、16は縄文晩期の突帯文土器、17、18は弥生土器である。19は第54層黒黄色土から出土した複合口縁の甕で、口縁部外面に擬凹線文を施し、弥生時代後期のものである。記載した土器以外にも第34層以下の土層からは図化はできなかったが弥生土器の破片が多く出土している。



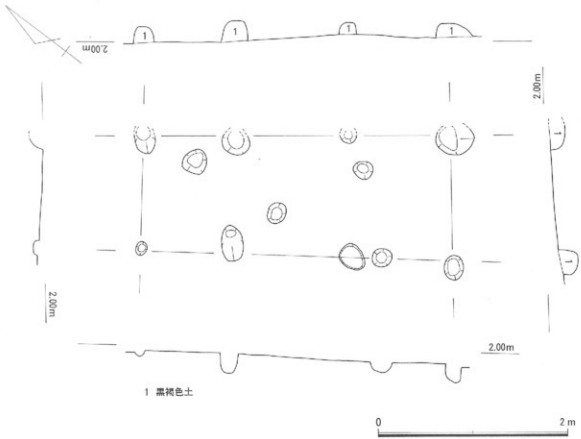
第15図　西後遺跡調査成果図（Ｓ＝１：300）



第16図　西後遺跡土層断面図（S＝1：80）



第17図　土層内出土遺物



第18図　SB01実測図（S ＝ 1 : 40）

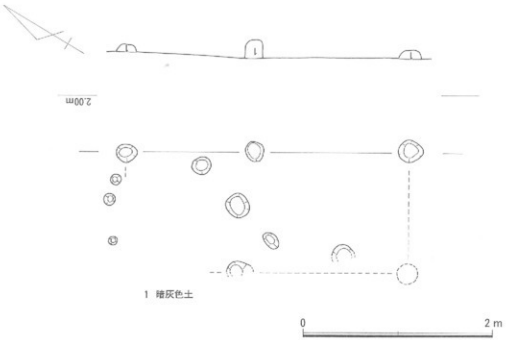
第３節　調査の成果

１．SB01（第18図）

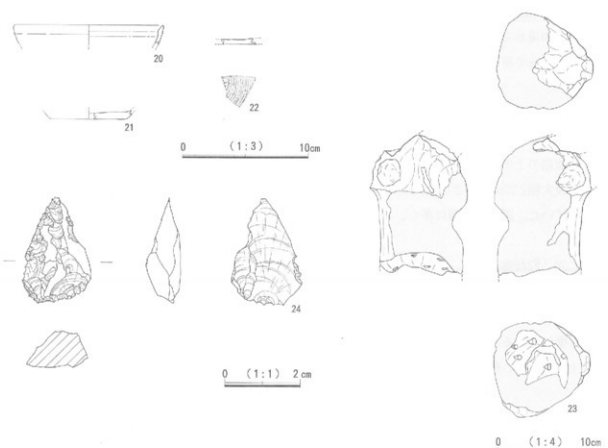
調査区北西側で検出した建物跡である。桁行３間×梁間１間の建物と考えられ、規模は桁行3.2m、梁間1.2mを測る小規模な掘立柱建物跡である。検出面標高2.0mを測る。北側の桁間は比較的等間隔であるが、南側は不均等な柱間になっている。柱穴は径10～40cm、深さ５～20cmと小さくて浅く、遺構面上の土層が堆積する際に遺構面が流失した可能性も考えられる。ピット内の埋土は黒褐色土である。埋土や遺構面から遺物は出土していないため時期は不明であるが、同じ遺構面のピット内（P１）からは須恵器の坏の口縁や土製支脚（第21図　20、23）が出土している。その坏の口縁は奈良時代以降のものと思われ、同時期またはそれ以降の建物跡と推測される。

２．SB02（第19図）

調査区中央で検出した遺構で、検出面標高は約1.5mを測る。桁行２間×梁間１間の建物跡である。規模は桁行3.0m、梁間1.2を測る。柱の大きさは径20cm前後、深さ10～20cmで、埋土は暗灰色土である。この建物の柱穴も小さく、浅いものであるため、遺構面が削平された可能性が高い。遺物は出土していないため時期は不明である。SB02の遺構面はSB01の遺構面より0.5m低く、調査区内でもやや低くなっているところで検出した遺構である。SB02遺構面上層、第53、54層のからは縄文土器１片の他に弥生土器片が多く出土しているだけであるため弥生時代以降の建物跡の可能性が考えられた。



第19図　SB02実測図（S ＝ 1 : 40）

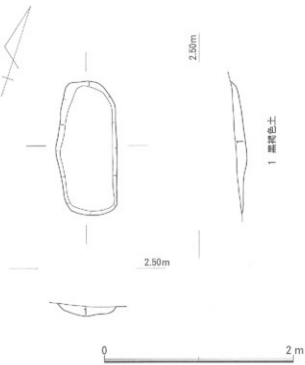


第20図　遺構外ピット出土遺物

SB02が廃絶したあと、土層が堆積し、古墳時代になってその周辺のやや高い場所に建物が建てられたのではなかろうか。

3．遺構外ピット出土遺物（第20図）

調査区内からはSB01、02の他に多数のピットが出土している。これらのピットは地山の高い部分、すなわち北西側と中央からやや南東側で多くみられた。ピット内の埋土も様々でピット内出土遺物も少なかった。20～22は須恵器である。20は坏の口縁、21、22は回転糸切り痕の底部であるが、21は摩滅していてはっきりしないが、8世紀以降のものである。23は土製支脚、24は黒曜石の鏃の未製品である。



第21図　SK01実測図（S＝1：40）

4．SK01（第21図）

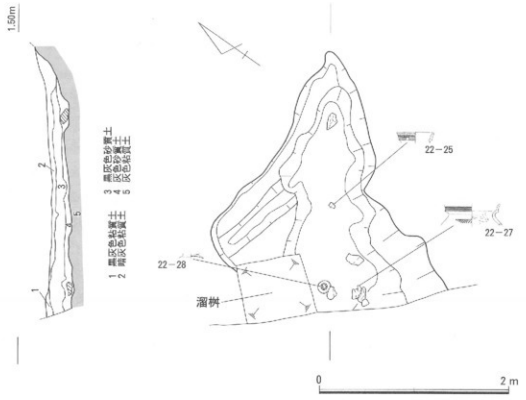
調査区中央からやや東側の標高2.00～2.20mの地山面で検出した土坑である。南北1.42m、東西0.6m、深さ10cmで楕円形を呈している。遺物が出土していないため土坑の性格や時期は不明である。

5．SR01（第22、23図）

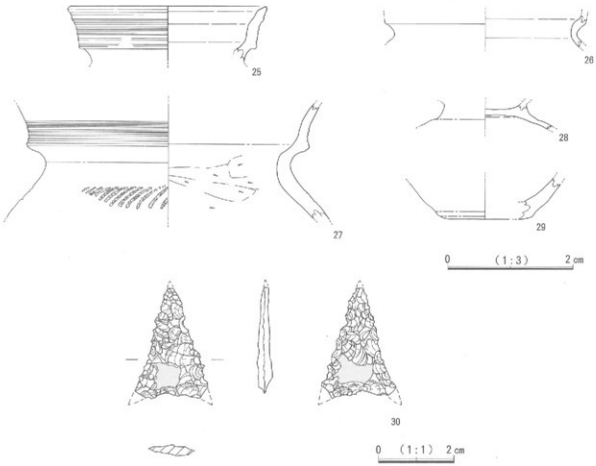
調査区南東側で検出した北東から南西に流れる自然流路である。北壁土層断面に流路の痕跡はみられず、流路の上半が削平されて下半部分の一部が残っているものと思われた。検出した遺構は長さ2.74m、最大幅2.25m、深さ0.2mを測る。遺構の上層は粘質土が堆積し、下層には砂混じりの砂質土が堆積していた。遺物は下層に多く、石と一緒に流れてきたと思われ、石の下や石と石との間から出土した。

25、26、27は弥生土器、複合口縁の甕である。27は口縁部外面に擬凹線文を施し、胴部上半に貝殻による刺突文を描く。弥生時代後期後葉のものである。28は台付甕か壺の脚端部で、弥生時代の終末か古墳時代初め頃のものと思われる。30は黒曜石の局部磨製石鏃である。先端と基端を欠き、基部の一部を磨いている。これは、石鏃を柄に装着する際に故意に磨いたものであまり例がない。

出土遺物から、弥生時代後期後葉から古墳時代初め頃の遺構と考えられた。



第22図　SR01実測図（S＝1：40）



第23図　SR01出土遺物

第4節　小結

西後遺跡発掘調査では、掘立柱建物跡2棟、土坑、自然流路、多数のピットを検出した。

SB01、02の掘立柱建物跡のピットは浅く、削平された可能性が高かった。また、建物跡以外にもピットが多く検出されていることから、このような丘陵の端部に建物が建ち、集落が形成されていたことは確かである。SB01は周辺の出土遺物から奈良時代以降の建物跡、SB02は弥生時代の建物跡の可能性が考えられた。当調査区の南側は弥生時代や古墳時代においては宍道湖であったと思われ、湖岸に面した集落であったと考えられる。人々の居住域が水害等の影響を受けたことによって、低地からやや高い場所へと移行していき、そして現在のような場所に至ったと推察される。

調査区南東側で検出した自然流路からは、弥生時代後期後葉から古墳時代初め頃の遺物が出土し、唯一時期を特定できる遺構であった。

今回の調査で遺物はあまり多くなかったが、中世を除く縄文時代から近世までの遺物が出土した。出土遺物の多くは弥生時代後期頃のもので、調査区周辺に同時期の遺構が存在する可能性が窺われた。調査区周辺で弥生時代の遺跡として知られているのは古曽志清水遺跡だけであり、当地域における弥生時代の人々の生活を知るうえでひとつの資料となったと思われる。

第3章の米塚遺跡では、弥生時代の遺物は出土していない。それ以降の遺物になると少量ではあるが、両遺跡で確認されている。部分的な調査であり一概にはいえないが、両遺跡の調査結果からすると、生活の場が弥生時代には丘陵の西側にあり、その後古墳時代頃になって丘陵全体に広がっていったと推測された。そして、当地域および周辺の人々が丹花庵古墳や古曽志大谷1号墳など多くの古墳造営の一端を担っていたのではなかろうか。

両調査区の北には北山山系が連なり、南には宍道湖が広がる。このような生活に適した場所で人々は狩猟、採集をおこなっていたと思われる。両遺跡の調査において、人々の生活の一端を垣間見ることができ、また、古墳や横穴墓の多い当地域において、掘立柱建物跡や中世墓が確認されたことは有意義であった。

【参考文献】
島根県教育委員会『古曽志遺跡群発掘調査報告書』　1989年

遺物観察表

土器

挿図番号	出土層位・遺構面	種類	器種	法量(cm) 口径	底径・頸部径	器高(残高)	色調 内面	色調 外面	調整 内面	調整 外面	形態文様	備考
17-1	第34層黒褐色土	弥生土器	甕		—	2.5	淡褐色	淡褐色	風化により不明	風化により不明		
17-2	第33層黒褐色土	弥生土器	甕	—	—	3.3	白灰色	赤褐色	ナデ 風化により不明	風化により不明		
17-3	第36層黒褐色土	弥生土器	底部	—	底径 7.8	2.3	明褐色	淡灰褐色	風化により不明	風化により不明		
17-4	第37層黒褐色土	弥生土器	底部	—	底径 6.2	4.3	淡灰褐色	明褐色	風化により不明	風化により不明		
17-5	第38層黒褐色土	須恵器	坏	12.4	—	3.0	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ		
17-6	第39層黒褐色土	須恵器	高台付坏	14.5	底径 9.0	5.6	淡褐灰色	黒色	風化により不明	風化により不明		
17-7	第34層黒褐色土	須恵器	高口壺	13.0		5.2	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ		
17-11	第52層暗灰色粘質土	弥生土器	甕	—	—	3.7	明褐色	明褐色	風化により不明	ナデ 風化により不明		
17-12	第53層暗灰色粘質土	弥生土器	底部	—	底径 7.6	2.8	淡灰色	淡赤灰色	風化により不明	風化により不明		
17-13	第54層暗灰色粘質土	弥生土器	底部	—	底径 9.2	4.1	橙色	橙褐色	風化により不明	風化により不明		
17-14	第55層暗灰色粘質土	弥生土器	注口土器	—	最大径 3.3	残存長 6.5	淡褐色	淡褐色	風化により不明	ハケ目 風化により不明		
17-15	第56層暗灰色粘質土	土師器	高坏	-	—	3.2	赤褐色	赤褐色	ハケ目	ハケ目		
17-16	第53層灰黄色粘質土	縄文土器	突帯文土器	—	—	1.4	黒灰色	茶色	風化により不明	風化により不明		縄文時代晩期
17-17	第54層灰黄色粘質土	弥生土器	甕又は壺	—	—	2.0	灰褐色	灰褐色	風化により不明	風化により不明		
17-18	第55層灰黄色粘質土	弥生土器	底部		底径 5.8	1.2	褐色	赤褐色	風化により不明	風化により不明		
17-19	第54層黒黄色粘質土	弥生土器	甕	—	頸部径 16.8	4.5	褐色	褐色	風化により不明	風化により不明	擬回線文	
20-20	ピット	須恵器	口縁部	11.7	-	1.5	灰色	灰色	回転ナデ	回転ナデ		
20-21	ピット	須恵器	底部	—	底径 6.1	3.7	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ		
20-22	ピット	須恵器	底部	—	—	0.5	灰色	灰色	回転ナデ 静止ナデ		回転糸切痕	
20-23	ピット	土師器	土製支脚		最大径 10.2	14.7		赤褐色		ナデ		
23-25	SR01	弥生土器	甕	15.6	—	4.4	淡灰褐色	淡褐色	風化により不明	ナデ	擬回線文	
23-26	SR01	弥生土器	甕	—	頸部径 14.6	2.6	淡褐灰色	淡褐灰色	風化により不明	風化により不明		
23-27	SR01	弥生土器	甕	-	頸部径 19.4	9.3	淡灰色	淡灰色	ハラ削り 風化により不明	ナデ	擬回線文 以鋭刺突文	
23-28	SR01	弥生土器	台付壺、甕 頸の接部	—	—	2.0	淡褐灰色	淡褐灰色	風化により不明	風化により不明		
23-29	SR01	弥生土器	底部	-	底径 7.5	5.4	淡灰色	淡灰色	風化により不明	風化により不明		内面　黒変

鉄製品

挿図番号	出土層位・遺構面	種類	法量(cm) 最大長	法量(cm) 最大幅	法量(cm)	重量(g)	材質	備考
17-8	第34層　黒褐色土	角釘	5.4	1.4		7.37		
17-9	第34層　黒褐色土	角釘	4.3	1.4		7.68		
17-10	第34層　黒褐色土	角釘	4.5	0.7		3.28		

石製品

挿図番号	出土層位・遺構面	種類	法量(cm) 最大長	法量(cm) 最大幅	法量(cm) 最大厚	重量(g)	材質	備考
20-24	ピット	石器の未成品	2.8	1.9	0.9	3.02	黒曜石	
23-30	SR01	石器	2.9	2.0	0.8	1.17	黒曜石	凹基式

第５章　土壌分析

米塚遺跡発掘調査において出土した耕作遺構について

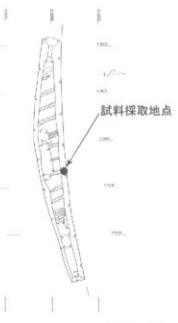
渡邊正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）

はじめに

米塚遺跡は、島根県東部に位置する宍道湖北側（松江市西谷町地内）、「出雲国風土記」にある「佐太水海」を望む微高地上に立地する。本報は、米塚遺跡において検出された耕作遺構（畦・畦間）の堆積構造の記載、及び微化石分析によって確認された作物について述べたものである。

分析試料について

第25図の調査区平面図中に試料採取地点を示す。更に第25図の断面図中に軟Ｘ線写真用試料を採取したおおよその位置を網掛けで示す（試料は第25図の断面から掘り込んで採取しているために、第26～30図の地層境界との間に差が生じている）。分析試料は軟Ｘ線観察後、11層の畦（試料№１）、畦間（試料№２）を対象にブロックで採取した（第30図）。



第24図　調査区平面及び試料採取地点

分析（観察）方法

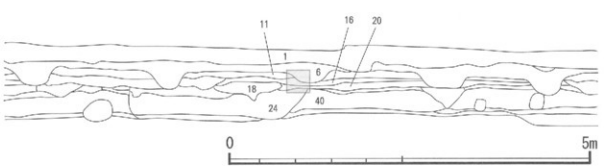
（１）軟Ｘ線観察方法

試料採取：発掘現場において25㎝×10㎝×１㎝の透明アクリルケースを用いてブロック試料を採取した。その後、試験室内で試料調整を行った。

軟Ｘ線撮影方法：以下の手順で軟Ｘ線写真を撮影した。

①　増感紙を挟んだ印画紙をケースの直下に置く。

②　40～45kVp・４mA程度の電流を50秒～１分20秒かけて試料の上方60～70㎝より照射し感光さ



1：黒褐色土（耕作土）　6：黄褐色土（やや軟かい）　11：にぶい黄褐色土（畝土）
16：黄褐色土　20：暗茶褐色土　18：灰褐色土（にぶい黄色土混）
24：灰褐色土（にぶい黄色土多い）　40：褐灰色土

第25図　試料採取地点断面図

せる。

試料観察：採取した試料及び軟X線写真を観察し、記載を行った。記載に当たり、「土壌記載薄片ハンドブック（久馬・八木：訳監修，1989）」を参考にした。

（2）花粉分析

渡辺（2010）に従い分析処理を行った。検鏡に当たり、プレパラートを光学顕微鏡下の400～1000倍率で観察し、原則的に木本花粉（化石）で100～250個の検定、計数を行い、同時に出現する草本花粉（化石）の検定、計数も行った。また中村（1974）に従い、イネを含む可能性が高いイネ科（40ミクロン以上）とイネを含む可能性が低いイネ科（40ミクロン未満）に細分した。

表1同定・検鏡対象分類群
（同定分類群と推定母植物の関係）

同定レベル	コード	分類群	対応する栽培植物
1	1	イネ	イネ
3	3	イネ科型（種の表皮細胞）	イネ
	21	ムギ類（類の表皮細胞）	コムギ・オオムギ
	41	オヒシバ属（シコクビエ型）	シコクビエ
	61	キビ族型	ヒエ・アワ・キビ
栽培植物との対応が明らかな分類群	62	キビ属型	キビ
	64	ヒエ属型	ヒエ
	66	エノコログサ属型	アワ
	84	ウシクサ族B	サトウキビ
	91	モロコシ属型	モロコシ
	93	ジュズダマ属型	ハトムギ

（3）植物珪酸体分析

藤原（1976）のグラスビーズ法に従い、分析処理を行った。プレパラートの観察・同定は、表1に示す母植物（栽培種）との関係が明らかな11分類群を対象として、光学顕微鏡下通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて行った。また、プラント・オパールと同時に計数したグラスビーズの個数が400を超えるまで計数を行っている。

分析結果

（1）軟X線観察

実視写真、軟X線写真（ネガ）、解析結果、分析試料採取位置を第26～30図に示す。

現地で記載されている最上位の「1層」から「40層」までの7層について、実視写真及び軟X線写真で判別する事ができた。以下では、下位から層ごとに記載を行っていく。また、この観察結果を基に、第30図に示した2試料を分取し、花粉分析、植物珪酸体分析を行った。

① 40層

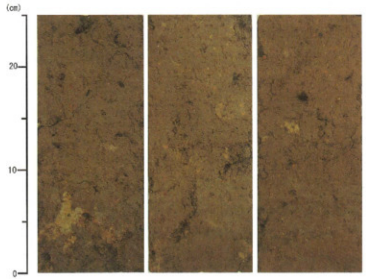
第3遺構面を覆い遺跡全体に分布する、細礫の混じる塊状の砂質粘土である。色調から大小のブロックに分かれているものと考えられる。

② 24層：土坑埋土で、40層のブロックのほか、細礫の混じる粘土からなる大小のブロックを含む。

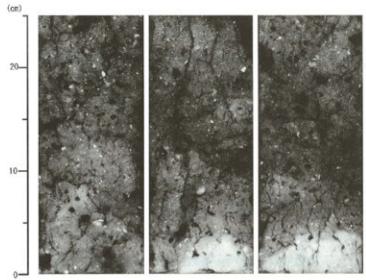
③ 20層：24層を覆い、耕土である11層の「床土」に相当する。細礫が混じる塊状の粘土で、所により粗砂がラミナ状に配列する。軟X線写真ではジグザグのチャンネルや根跡と考えられる直線的なチャンネルが多く認められる。ペッドの発達はやや弱く、亜角塊状～角塊状を呈する。

④ 16層：20層、24層を覆い、耕土である11層の畦部での「床土」に相当する。細礫の混じる塊状の粘土で、所により細砂がラミナ状に配列する。20層との境界部には細砂が密集し、明瞭な境界を成す。軟X線写真ではジグザグのチャンネルや根跡と考えられる直線的なチャンネルが認められる。ペッドの発達は弱く、亜角塊状を呈する。

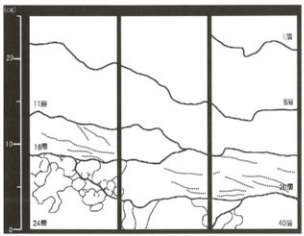
⑤ 11層：耕作土と考えられる、遺跡全体に分布する細～中礫混砂質粘土。軟X線写真での色調は下位の16、20層、上位の6層に比べ暗く、孔隙がより多いことを示唆する。ペッドの発達は中～



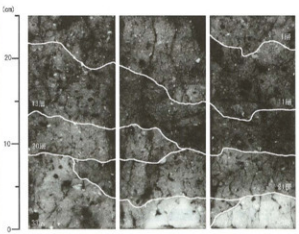
第26図　実視写真



第27図　軟X 線写真（ネガ）



第28図　解析結果（地層境界･ラミナ･ブロック）

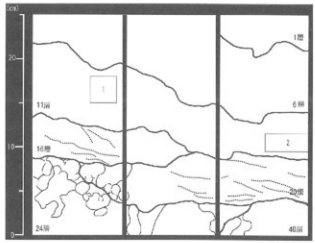


第29図　解析結果（軟X 線写真と地層境界）

やや強度で、数mlの１次ペッドが集まり～２cm程度の２次ペッドを成している。

⑥　６層：耕作土と考えられる11層を覆い、遺跡全体に分布する細礫の混じる砂質粘土。上面が第１遺構面を成している。軟Ｘ線写真では根跡と考えられる直線的なチャンネルが顕著。水平方向の根跡には緩い粗砂質粘土が充填される。

⑦　１層：現代耕土で、細～中礫混砂質粘土。ペッドの発達は中～やや弱く、１cm程度のペッドを成している。



第30図　分析試料採取位置

（２）微化石概査結果

花粉分析処理に際して作成したプレパラート、及び残渣を利用した微化石の含有状況（概査結果）は、表２のとおりである（植物片、炭は花粉分析用プレパラートを観察した。珪藻、火山ガラス、植物珪酸体は、花粉分析処理の残渣を観察した）。

（３）花粉分析結果

花粉分析の結果を、第31図の「花粉ダイアグラム」に示す。

「花粉ダイアグラム」では、各々の木本花粉、草本花粉、一部の胞子について、計数した木本花粉を基数にした百分率を算出してスペクトルで表したほか、「総合ダイアグラム」として分類群ごとにこれらの総数を基数とした、累積百分率としてスペクトルで表した。更に右端に、各試料での分類群ごとの含有量を折れ線グラフで示した。

（４）植物珪酸体分析結果

植物珪酸体分析の結果を、第32図の植物珪酸体ダイアグラムに示す。植物珪酸体ダイアグラムでは、試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体粒数を算出し、スペクトルで表している。

花粉分帯

花粉分析では、花粉化石群集の変遷を基に局地花粉帯を設定し、花粉帯ごとに古植生、古気候の推定を行う。今回の分析は耕作土と推定された11層内での作物を調べることであり、同時期の試料を対象としたために花粉化石群集の変遷が認められず、花粉分帯を行わなかった。

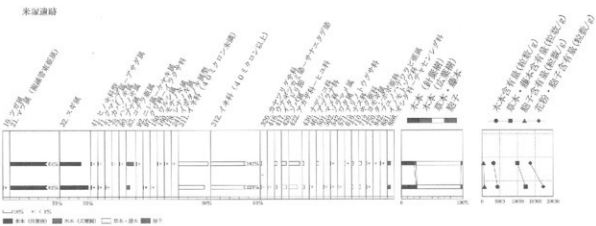
堆積時期の推定（花粉層序）

ここでは、渡辺（2009）の地域花粉帯と対比し、各花粉帯の堆積時期について考察する。渡辺（20

表２　微化石概査結果

試料No.	花　粉	炭	植物片	珪　藻	火山ガラス	プラント・オパール
1	◎	◎	△	△	△	◎
2	◎	◎	△	△	△	◎

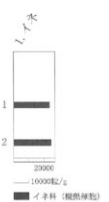
凡例　◎：十分な数量が検出できる　○：少ないが検出できる　△：非常に少ない　△×：極めて まれに検出できる　×：検出できない



第31図　花粉ダイアグラム

09）の地域花粉帯は、大西ほか（1990）によってまとめられた中海・宍道湖地域の地域花粉帯を最新の成果を基に再設定したものである。ただし、基となるデータの多くは中海・宍道湖湖底堆積物と出雲平野、目久美遺跡（米子市）で得られたもので、松江市内では西川津遺跡と出雲国府跡のデータが利用されているにすぎない。

地域花粉帯との対比のポイントは、今回得られた分析結果（花粉化石群集）ではマツ属（複維管束亜属）が卓越すること、更にスギ属が高率で出現することである。マツ属（複維管束亜属）の卓越は、中世以降近代の植生を示すイネ科帯マツ属亜帯及び現代の植生を示すマツ属・スギ属亜帯で認められ、更にスギ属が高率になるのはマツ属・スギ属亜帯に入ってからである。マツ属亜帯からマツ属・スギ属亜帯でのスギの急激な増加は太平洋戦争後の植林政策によると考えられており、それ以前はスギ属化粉は低率である。



第32図　植物珪酸体ダイアグラム

一方、今回の調査地点は佐太水海に面し、湿潤を好むスギの生育に適した土地条件を備えており、11層堆積時期にスギの天然林が近辺にあった可能性がある（ただし、「出雲国風土記」にスギの記載はない。）。また、今回の分析は11層のみであり、花粉化石群集の変遷が捕らえられていない。これらのことから、今回得られた花粉化石群集は、イネ科帯マツ属・スギ属亜帯の特徴を持つが、イネ科帯マツ属亜帯の時期の植生を示す可能性もある。

古環境（古植生）の推定

花粉化石群集を基に周辺の山地植生及び11層での畑作物について考察する。

（1）山地植生

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、調査地背後の丘陵にはアカマツ（あるいはクロマツ）を主体とする薪炭林が分布していたと考えられる。一方スギは、前述のように植林とする考えと、天然林とする考えがある。スギは現在でも丘陵から山地にかけての広い範囲で植林されている。現在ほどではないにしろ、薪炭林が伐採され、スギの植林が成されたものと考えられる。一方天然林と考えた場合、佐太水海周囲の低地や、ここからリアス式に伸びる谷筋に分布していた可能性がある。

（2）（畑）作物

記載を行った7つの層の内、11層では孔隙が多くベッドも発達しており、現地で観察されたように耕土の可能性が高かった。花粉分析結果でも、イネ科（40ミクロン以上）、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ソラマメ属、ワタ属、ナス科などの作物由来、あるいは可能性のある種類が多く検出された。

イネ（40ミクロン以上）花粉は、イネの植物珪酸体も多量に検出されることから、ほとんどがイネに由来すると考えられる。一方で、いわゆる水田雑草がほとんど検出されず、花粉化石の含有量がやや少ないこと、表2で示した微化石概査結果で珪藻化石がほとんど検出できなかったことから、「陸稲」の可能性が指摘できる。

また、ソバ属、ワタ属は外来種でありソバ、ワタそのものに由来する。両種類とも検出量が複数粒であり、調査地で栽培されていたと考えられる。

アカザ科－ヒユ科はヒユ、ソラマメ属はソラマメ、ナス科にはナス、ホオズキなどの栽培種があるが、自生する「雑草」も多いことから栽培の可能性を指摘するにとどめたい。

まとめ

米塚遺跡における農耕についての確認を行う目的で、耕作層の軟X線観察及び花粉分析、植物珪酸体分析を実施した。それぞれの観察、分析から得られた所見は以下の通りである。

（1）軟X線写真（ネガ）では、観察耕作層と考えられていた11層の色調がその外の層準に比べ暗く、ベッドの発達は強かった。これらのことは、その外の層準に比べ孔隙が多いことを示唆する。一方で、その外の層準で顕著な直線的なチャンネルはほとんど認められず、一部の層準に認められたラミナも観察されなかった。これらのことは、11層ではその外の層準に比べ擾乱が進んでいたことを示し、耕作を示唆する結果といえる。

（2）11層の花粉分析、植物珪酸体分析の結果、11層でイネ、ソバ、ワタが栽培されていたことが、ほぼ明らかになった。水田雑草由来の花粉化石がほとんど検出されず、珪藻化石もほとんど検出されなかったことから、イネが「陸稲」であった可能性が指摘できた。このほか、ヒユ、ソラマメ、ナスなどが栽培されていた可能性が指摘できた。

【引用文献】

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）　数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，15-29.

久馬一剛・八木久義訳監修（1989）土壌薄片記載ハンドブック．p.176，博友社.

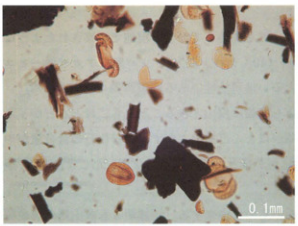
中村　純（1974）イネ科花粉について，とくにイネを中心として．第四紀研究，13，187-197.

大西郁夫・千場美樹・中谷紀子（1990）穴道湖湖底下完新統の花粉群．島根大学地質学研究報告，9，117-127.

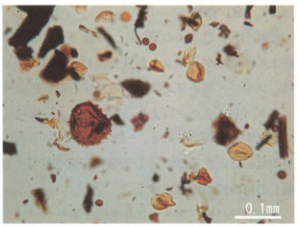
渡辺正巳（2009）山陰地方における完新世の花粉層序と古環境－花粉考古学を用いて－．島根大学博士論文.

渡辺正巳（2010）花粉分析法．必携考古資料の自然科学調査法，174-177．ニュー・サイエンス社.

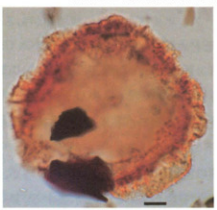
渡辺正巳（2010）山持遺跡7区②発掘調査に係る花粉分析．山持遺跡Vol.6（4，6，7区），国道431号道路改良事業（東林木バイパス）に伴う埋蔵文化財調査報告書，8，178-185．島根県教育委員会.



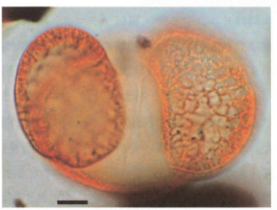
試料No.1（花粉化石含有状況）



試料No.2（花粉化石含有状況）



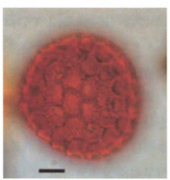
ツガ属



マツ属（複維管束亜属）

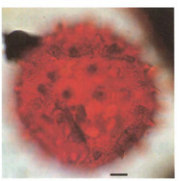
スギ属

コナラ亜属



ｸﾘｷﾞｭｳﾓﾐ節-ｻﾅｴﾉｷﾃﾞ節

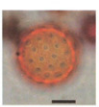
ソバ属



ワタ属

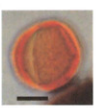
ニレ属-ケヤキ属

イタドリ節

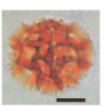


アカザ科-ヒユ科

キク亜科



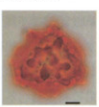
ヨモギ属



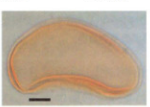
タンポポ亜科

マメ科

ソラマメ属



イノモトソウ属



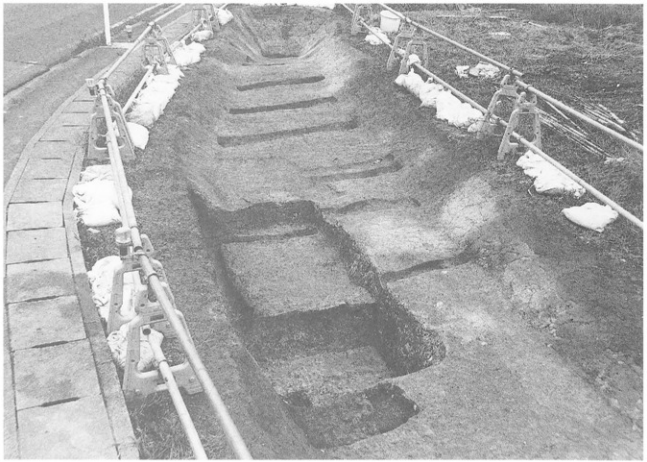
ｵｼﾀﾞ科-ﾁｬｾﾝｼﾀﾞ科

スケールバーはすべて 0.01 mm

図　　版

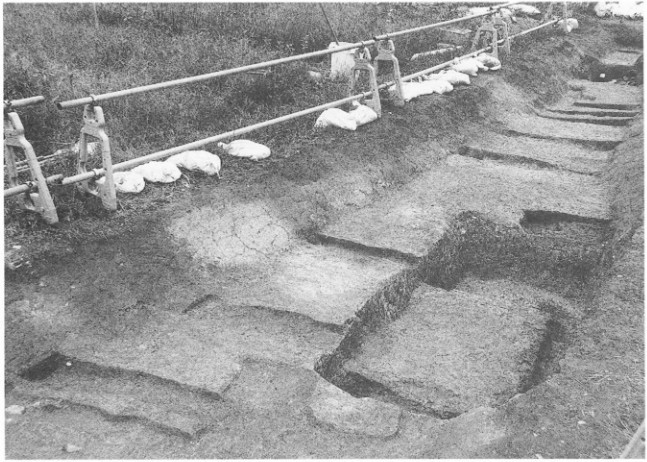
西後遺跡から西側に古曽志大谷１号墳を望む

米塚遺跡調査前全景（西から）

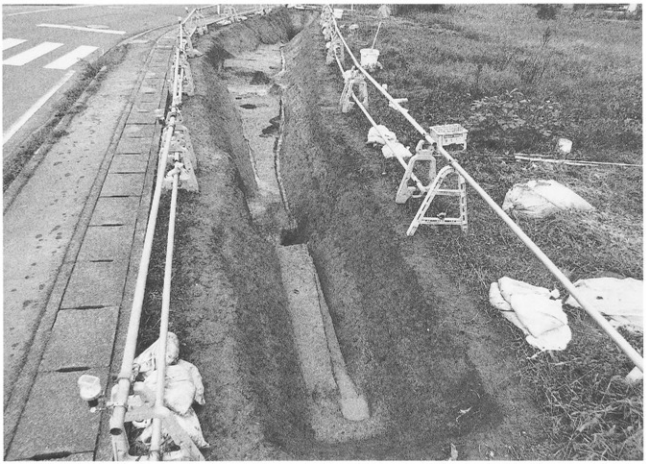


第１遺構面西側完掘状況（南東から）

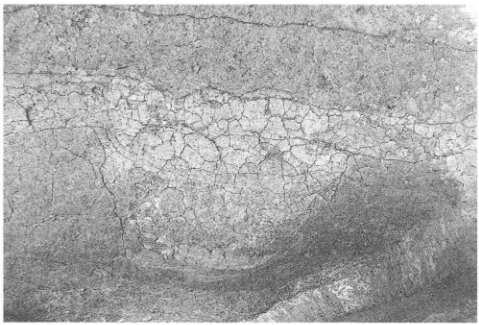
図版２　米塚遺跡



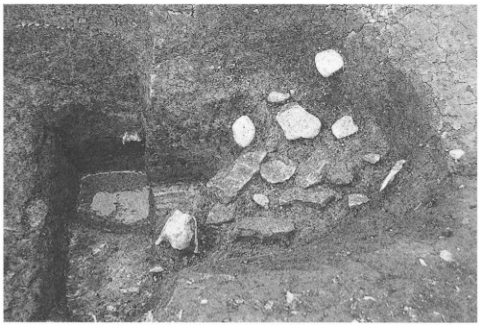
第１遺構面東側完掘状況（南西から）



第３遺構面完掘状況（東から）

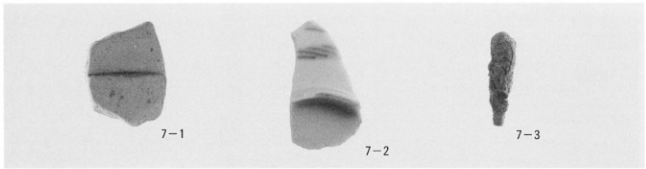


第２遺構面中世墓土層
断面（南から）

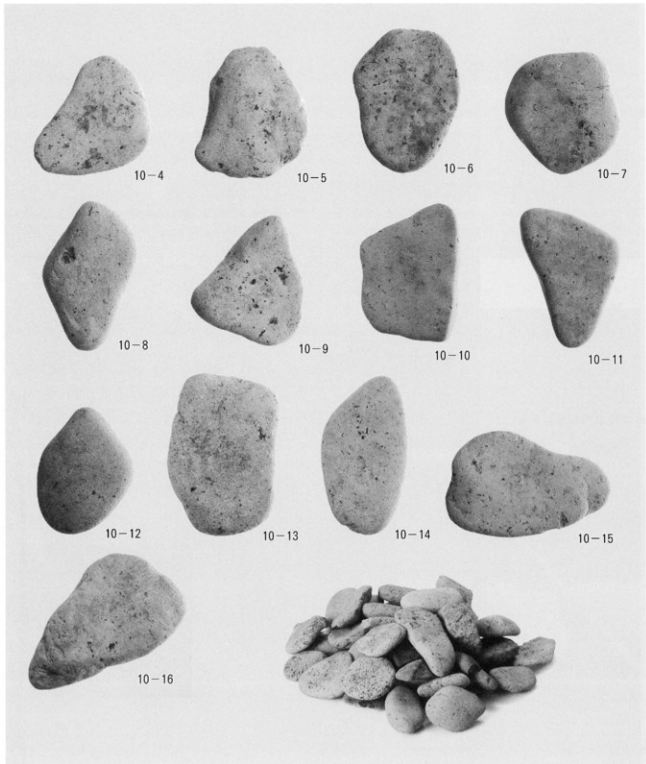


中世墓石出土状況
（南から）

中世墓完掘状況
（西から）



第１遺構面出土遺物

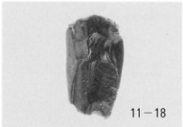


第２遺構面中世墓出土遺物（経石）

10－17
（側面）

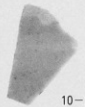
10－17
（下面）

第２遺構面中世墓出土遺物（火輪）


11－18

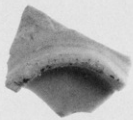
第３遺構面出土遺物

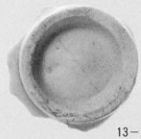
10－19


10－20

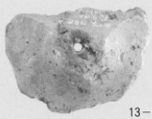
13－24

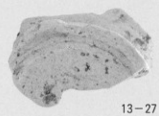
13－21


13－22


13－23

13－25


13－26


13－27

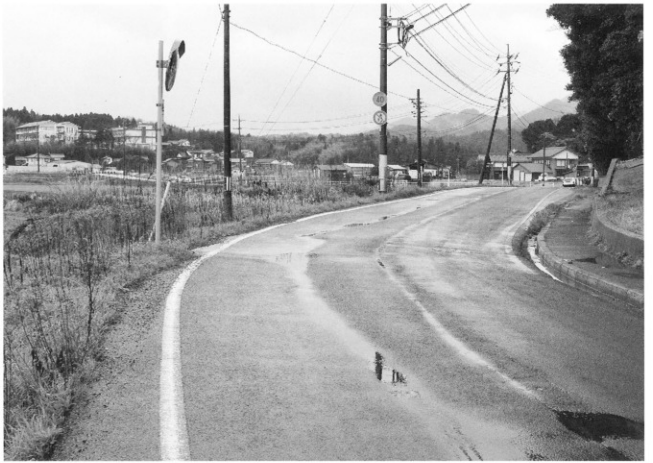
13－28

13－29

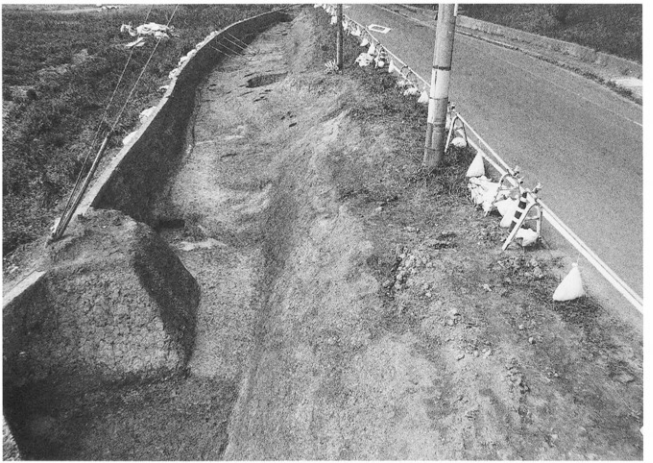
13－30

遺構外出土遺物

図版 6　西後遺跡



西後遺跡調査前全景（東から）



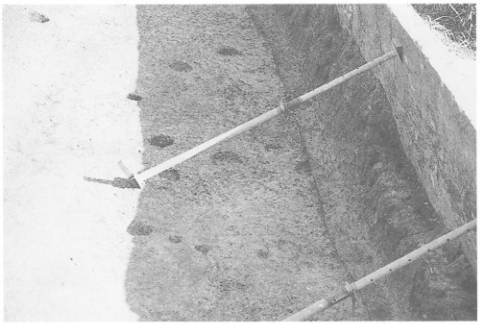
西後遺跡完掘状況（南東から）

調査区北西側SB01完掘状況（北西から）

SB01の南西側ピット完掘状況（南東から）

調査区中央ピット完掘状況（北西から）

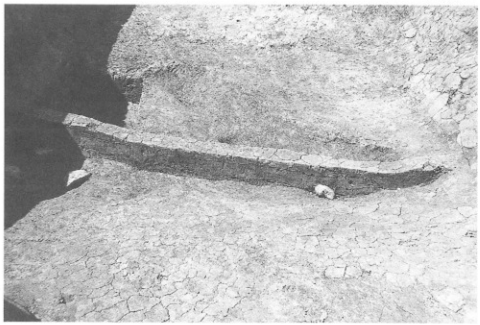
図版 8　西後遺跡



SB02完掘状況
（北西から）

調査区南東側ピット完
掘状況（南から）

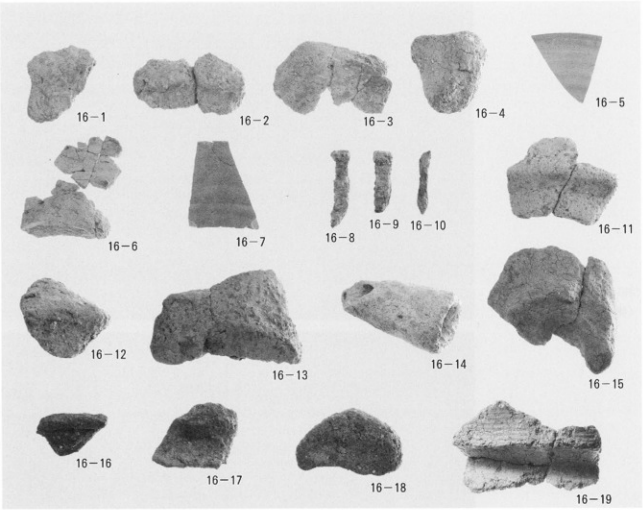
SK01完掘状況
（南東から）



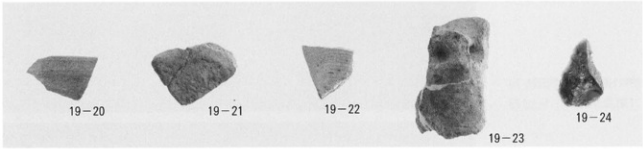
SR01土層堆積状況
（南東から）

SR01遺物出土状況
（南東から）

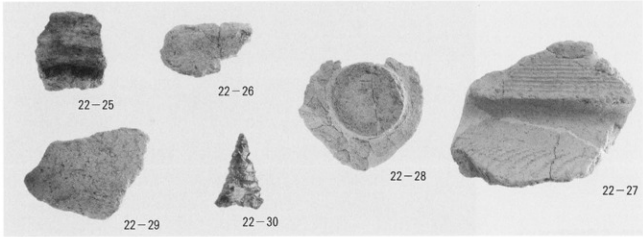
SR01完掘状況
（南から）



土層内出土遺物



遺構外ピット出土遺物



SR01出土遺物

報 告 書 抄 録

ふりがな	よねつかいせき・にしのうしろいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	米塚遺跡・西後遺跡発掘調査報告書
副書名	市道古志大野線道路改良事業に伴う発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松江市文化財調査報告書
シリーズ番号	第136集
編著者名	廣濱世子
編集機関	松江市教育委員会 財団法人松江市教育文化振興事業団
所在地	文化財課　〒690-0826 島根県松江市学園南1-17-24 環境センター2F TEL：0852-55-5284 埋蔵文化財課　〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL：0852-85-9210
発行年月	2011年1月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	調査面積	調査原因
米塚遺跡	島根県 松江市 西谷町	32201	M-085	35°48′43″ 133°00′62″	20100820 ～ 20100914	64㎡	市道古志大野線道路改良事業
西後遺跡	島根県 松江市 西谷町	32201	M-084	35°48′46″ 133°00′48″	20100921 ～ 20101015	297㎡	市道古志大野線道路改良事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
米塚遺跡	集落跡 中世墓	古墳時代 中世 近世	柱穴 中世墓 畑跡	須恵器 土師器 五輪塔（火輪） 経石 黒曜石	経石，五輪塔を伴う中世墓
西後遺跡	集落跡	弥生時代 古墳時代	掘立柱建物跡 柱穴 土坑 自然河道	土師器 須恵器 弥生土器 石器 黒曜石片 鉄製品	掘立柱建物跡 弥生土器出土の自然河道

松江市文化財調査報告書

平成23年1月

発行　松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷　有限会社　松陽印刷所
島根県松江市学園南2－3－11